

Ramachandra Guha,

*India after Gandhi: The
History of the World's
Largest Democracy.*

London : Macmillan, 2007, xxvi+900 pp.

きとう ひろし
佐藤 宏

I 独立後インドの同時代史^(註1)

本文のみで約800ページの本書は、マハートマー・ガンディー亡きあとの独立インドの政治史を描いた大作である。インド内外の史資料館が所蔵する膨大な一次資料、また精選された二次資料に依拠して、約半世紀の独立インドの歩みを臨場感豊かに描き上げるのは並大抵の力量ではない。著者の記述の基本は、同時代の観察や感覚を重んじることにある。「あと知恵」の力を借りて歴史を描かないということである(p.xxvi)。一次資料や、回想録などを巧みに利用しながら、その瞬間を記録するのに最もふさわしい目撃者を登場させることは、そうたやすい作業ではないだろう。本書では同時代のイメージをかきたてるこのような手法が徹底して用いられる。歴史の「構造的な」把握に慣れた目には、何かエピソードの連続で綴られた歴史記述のように見えよう。こうした語り口が選ばれる理由は、本書に託した著者の究極の意図と深く関係しているように思われる。まずは、それを探るところから始めたい。

1947年8月15日の独立以後、インドの国民は、国の解体とインド民主主義に関する「終末の予言」を繰り返し聞かされてきた。ネルー政治の末期には、言語、宗教、カーストの亀裂によって、インドという政治共同体の分解を予告する論調が、さかんに流布された。また1967年の第4次連邦下院選挙から70年代の非常事態期にかけては、とりわけ国外のメディアによって、「独立インド最後の選挙」とい

う悲観的な見出しがたびたび掲げられた。こうした悲観論の根本には、貧富の越えがたい懸隔、多種多様な文化をうちに抱えた「国」(nation)が、分解もせずに政治的民主主義制度を維持しているのは「不自然だ」(unnatural)とみなす観念があるからだと著者はいう。

著者は本書の Prologue : Unnatural Nation (プロローグ——不自然な国——)で、分解や崩壊から免れる不思議な生命力がインドにあるのはなぜか、いく度となく聞かされてきた不吉な予言がそのたびに裏切られてきたのはなぜか、と本書全体を通じて挑むべき疑問を示している。冒頭にひかれるミルザー・ガーリブ (1797~1869年)の詩は、同時代のインドの混沌を浮かびあがらせるうえで、このうえなく効果的である。古都ワラーナシーで出会ったヒンドゥー聖者に彼は問う。「親兄弟が殺し合い、真、善、信、愛、ことごとく喪われたこの世に、なにゆえに終末の日が訪れぬのか、いったい破局の手綱はどなたが握っておられるのか」と(p.xi)。ガーリブに重ねて著者も、インドとその民主主義に破局が訪れないのはなにゆえかと問うのである。

その回答は、ガーリブへの聖者の返答とともに終章の Epilogue : Why India Survives (エピローグ——インドが生き残る理由——)で開示されることになるが、一言でいえば、それは、数億の有名無名の人々の営み、自らが価値あるとする理念に忠実たらんとする人々の営みに求められる。著者の意図は、同時代の記録のなかから、そうした営みの数々を掬いあげることである。そうした意図を実現するためには並々でない語り手としての能力が要請されるが、本書では随所に、著者の (hi)story-tellerとしての能力が披瀝されているのである。

II 本書の構成の特徴

本書の内容はあまりに長大であるので、とりかかりとして全体的な構成の特徴と思われる点を指摘しておきたい。

すでに紹介したプロローグを除くと、著者は本論

部分で、独立後の政治史を5つの画期に分ける。第I部 *Picking up the Pieces* (破片のかき集め) では分離独立からインド憲法の施行までの国家形成期、第II部 *Nehru's India* (ネルーのインド) は第1次普通選挙に始まる1950年代の政治・経済制度の構築期、第III部 *Shaking the Centre* (揺らぐ中枢) がケーララにおける共産党政権の成立から中印国境戦争での敗北を挟んでネルー後政治へと移行する時期、第IV部 *The Rise of Populism* (頭をもたげるポピュリズム) は、第2次印パ戦争、インディラ・ガンディー政権の登場から非常事態期をへて、ラジーヴ政権の登場までを扱う。時間の継起にそった記述は、この時点で終了する。最後の第V部 *A History of Events* (事件の歴史) では1980年代末以降の政治が5つの主題に即して記述される。

独立後の政治史の画期についての著者のこのような整理の仕方は、大方のイメージとおおきくかけはなれてはいない。しかし、700ページを超す本論を時間の継起のみに沿って記述すれば冗長感を免れないだろう。そのためか著者は、第I部と第II部は、時間軸に沿いながらも、各章は単一の主題を扱うように設定している。合計で280ページ余りのこの冒頭の2部で、独立後の政治史における中心的なテーマが、軽重の差はありながらも、ほぼもれなくカバーされることになる。

これに対して第III部と第IV部では、記述のトーンには、より時間軸先行の色彩が強くなる。各章はネルー亡きあとのインド政治の重要な段階に照応して配置される。そのなかに第I部と第II部で紹介されたテーマが、時間の継起に即して織り込まれる。テーマは時間軸のなかに埋め込まれるので、個別のテーマ、たとえばカシュミール問題やヒンドゥー・ムスリム関係に関心を持つ読者は、いくつかの章にまたがる記述を読みつなげなければならない。

この第IV部までが、本書の「同時代史研究」のほぼ上限となる。第V部を著者は、自ら“historically informed-journalism” (歴史に通じたジャーナリズム, p.601) の仕事として位置づける。ここではクロノロジカルというよりは、冒頭の2部と同じくテーマ別の構成に戻る。ここで扱われる出来事

(events) は、歴史の遠近法に照らすにはあまりに身近すぎるからである。

以下、第I部から第IV部までを2部ずつ前半と後半に分けて、各章から目についた指摘を、批評を交えつつ、かいつまんで紹介する。第V部については後半部分のなかで短く触れるにとどめよう。なお、各章の標題に著者はかなり工夫を凝らしているので、その解説はともかくも、英語表記は添えておきたい。

III ガンディー亡きあとのインド

第I部ではイギリス統治の残したさまざまな「破片」をひとつの国家へとまとめ上げる惨憺たる苦闘のあとが物語られる。第1章 *Freedom and Parricide* (自由と父殺し) の冒頭では、1947年8月15日の前夜に始まる独立記念式典の克明なスケジュールを含む祝祭の雰囲気は微細に描かれるが、これはカルカッタの貧民街にとどまるガンディーの姿を対照的に描くための舞台装置なのである。著者の筆力を感じせしめる冒頭部である。著者の目はさらにデリーに移動するガンディーをおって、その暗殺までを記録するが、章の末尾で、ガンディーの死はヒンドゥー・ムスリムの融和よりもネルーとパテルの融和をもたらした点で意味がある (p.24) と結ぶ。続く第2章 *The Logic of Division* (分割のロジック) では、分割の決定と騒乱による犠牲者の規模とは、いちおうは論理上別の問題であるとしたうえで、独立のスケジュールを早めた総督マウントバトンの動機を問う。もちろん著者はここで歴史に「もし」を持ち込もうというのではなく、十分に予期されはずの混乱への備えの欠如を問題にしているのである (p.34)。

さらに第3章 *Apples in the Basket* (籠のなかのリンゴ) では藩王国の統合に重要な役割を果たした人物として、制憲議会への参加を藩王仲間に訴えたピカーネルの藩王 (その後ろに自身もインド制憲議会議員であった宰相 K.M. パニカルがいる) そして、藩王国相 V. パテルは無論のこと、とりわけ官僚 V.P. メーノンの貢献を強調する。非インド文官職 (ICS) であるがゆえのメーノンの屈折し

た内面にまで著者は分け入り、藩王国統合問題で彼の著作に勝るものはいまだなしとする。

第4章 A Valley Bloody and Beautiful (残忍にして美しき谷) は、印パ両国関係の恒久的なトゲとなるカシュミール問題が主題である。ネルーが、軍事的な制圧のみによってカシュミールをインドにつなぎとめることの困難さを十分認識し、カシュミール分割をも視野に入れた柔軟な選択を考えていたことを、ネルーによる藩王あて書簡(1947年12月)に依拠して指摘する(pp.71-72)。

第5章 Refugees and the Republic (難民と共和国) は主として西部国境の難民流入を扱う。難民流入は新国家への政治的な挑戦であった。インドは外部の力を借りず、自らの知恵と刻苦によってこの挑戦に応えたことが強調される(p.94)。最後の第6章 Ideas of India (インドという理念) では、競い合う国家構想を方向づけ、成文化するという尋常でない課題が、制憲議会議員を中心とする有能な政治家、法律家らの手によって成就され、インドが自らの統治能力を立証したとする^(註2)。

続く第II部は第7章 The Biggest Gamble in History と題される章で始まる。1951年10月25日ヒマラヤ山麓の山村での投票から始まった「史上最大のギャンブル」(ジャーナリスト C.R. シュリーニヴァーサンによる形容)、すなわち独立後初の成人普通選挙の経験が詳述される。著者はこの選挙の実施を有権者1億7600万人の壮挙とたたえ、初代の選挙管理委員長であった S. センら ICS 官僚を中心とする行政官の能力を高く評価する(pp.149-150)。ついで第8章 Home and the World (国の内と外) では、ネルーの外交政策がやや首尾一貫性を欠いたものとして批判的に回顧される。ハンガリー動乱へのあいまいな態度、中国への警戒感の欠如などの指摘は、ネルー外交批判のひとつの定型でもあろう^(註3)。

第9章 Redrawing the Map (インドの新たな地図) は州の再編成を扱う。焦点はパンジャブとアーンドラの言語州要求にあてられる。とくにアーンドラのテルグ語州創設を要求して断食死したポッティ・スリラムル(Potti Sriramulu)こそが、州

再編の引き金を引くことで独立インドの新しい地図を描かせたとして、「ネルーが現代インドの建設者であるとすれば、彼は現代インドのメルカトール(地図作製者)である」(p.200)とたたえる。

第10章 The Conquest of Nature (自然の征服) では、ネルーが計画経済を民間資本に押し付けたという主張を、国家による経済介入の必要を説く「ボンベイ・プラン」の存在をあげて、「嘘」(lie)であると強い言葉で反駁する^(註4)。国家の経済介入は当時においては、ある種の「時代精神」であった。しかし、「時代精神」に抗して、自由主義的批判(B.R. シェノイ, B.V. クリシュナムルティーら)、あるいはガンディー主義者による環境主義からの批判が存在したことも見逃されるべきではないとする。

第11章 The Law and the Prophets (法と預言者) では、インドの政教分離主義の試金石となったヒンドゥー家族法の改正問題を扱う。植民地期以来の議論から説き起こし、ヒンドゥーの正統派からの強硬な反対論に直面した首相ネルー、法相 B.R. アンベードカルの対応を描く。1951年には法相アンベードカルを支えきれなかったネルーは、52年の第1次連邦下院選挙によって党内での地歩を確保した後に、改正の主導権をとったとみている(pp.240-241)^(註5)。

第12章 Securing Kashmir (カシュミールの確保) では、第4章以後のカシュミール問題が扱われる。信頼と懐疑のあいだを揺れ動くシェイフ・アブドゥッラーとネルーの関係がきめ細かに描かれる。シェイフが最も危惧したのは、ネルー亡きあとのインドとの関係であり、それを裏付けるかのようにヒンドゥー大連合総裁 S.P. ムカージーによるカシュミール統合運動が、シェイフの逮捕に始まるカシュミール・インド関係悪化へのきっかけとなった。その後の事態は第16章へと続く。

第13章 Tribal Trouble (トライブ問題) では、中央政府の権威と正統性への挑戦が東北インドのナガ民族の間に芽生え、内戦へと発展する過程を追う。他方、自治権運動の枠を超えなかったインド内陸部のトライブによるジャールカンド党の運動が対比的に描かれる。

IV ネルーの死去とその後のインド

中央政府の権威への挑戦は、カシュミール、ナガといった周縁部から、1950年代末以降、しだいにインド政治の中枢部へと広がってゆく。第III部では、ネルー政権の終焉までが描かれる。第14章 The Southern Challenge (南からの挑戦) では、ケーララの共産党政権倒壊、スワタントラ党結成、ムンドラ事件などを通じてネルー政権のかげりを示唆する。続く第15章 The Experience of Defeat (敗北の経験) では、1959年3月のグライ・ラマ14世の亡命から62年11月の国境戦争敗北までの動きを追うが、著者はインド政府の立場に沿った記述に終始している。マクマホン・ラインをはじめとする国境問題をめぐるインド政府の立場に批判的な研究者(たとえばK.グプタなど)とは立場を異にする。

ついで、第16章 Peace of Our Time (わが時代の平和) では、中印戦争の敗北によって老いを深めたネルーが、シェイフ・アブドゥッラー釈放と彼のパキスタン訪問をとおして、カシュミール問題を打開しようとした最後の試みに光を当てる。成算自体が不確かであったこの試みは、ネルー自身の死をもって頓挫した。第17章 Minding the Minorities (マイノリティへの配慮) では、国家的忠誠への嫌疑にさらされたムスリムや、社会的差別に苦しむ不可触民など、ネルー政権期におけるマイノリティ社会の状況を描く。

第IV部はネルー以後の政治を扱うが、このなかでは、なんといってもインディラ・ガンディー首相の「参謀役」をつとめたP.N.ハクサルの保存文書(ネルー記念ミュージアム図書館所蔵)に依拠した部分が非常に興味深い^(註6)。

まず第18章 War and Succession (戦争と後継問題) では、シャーストリーの首相就任、ナガランドでの休戦、ヒンディー語と南インド、カシュミールの袋小路、シェイフの再逮捕、第2次印パ戦争、農業重視政策への転換(高収量品種導入の端緒)が矢継ぎ早に紹介される。欧米の悲観的論調が最高潮に達するのがこの時期である。第19章 Leftward

Turns (左翼旋回) では、1967年の第4次連邦下院選挙での会議派の後退と、それをもたらした地方政党、左翼政党などの進出が語られるが、著者はむしろナクサライトの登場を重視している。ガンディー首相の巻き返し策を練り上げたハクサルら5人のカシュミール・バラモンからなる顧問団の動きがハクサル文書に依拠して詳述される(p.434以降)。同ペーパーの利用効果は、第20章 The Elixir of Victory (勝利の錬金薬) でもきわめて強力である。1970年12月の連邦下院解散からバンガラデシュ解放、戦後処理にいたるまでのハクサルの中心的な役割が描かれる。しかし、ハクサルらの役割は、第21章 The Rivals (ライバル同士) に入り、インディラとJ.P.ナラーヤンの敵対が深まるなかで、しだいに後景に退き、1975年6月の国内非常事態宣言発令へと進む。非常事態期を扱う第22章 Autumn of the Matriarch (女帝の黄昏) では、一方で、官僚、学者らの公職からの辞任、ジャーナリストの抗議など非常事態への抵抗、他方で次男サンジャエ・ガンディーとその取り巻き(そのなかには現在の選挙管理委員長、ナヴィーン・チャウラーも含まれるが)の蠢動が描かれる。インディラがサンジャエにも知らせず選挙実施を宣言した理由について、著者はイギリスにおける知印派によるインディラ批判を気にした可能性があると示唆する(註7)。

第23章 Life Without the Congress (会議派抜きの生活) では、1977年の下院選挙以降の中央と州での非会議派政権に焦点があてられるが、ジャナタ党政権の鉄道相M.ダングヴァターによる二等座席のフォウムラバー化、一部の州政権が導入した給食制度など、民衆生活へのきめ細かい配慮に言及する。フェミニスト運動、環境運動など、政党の細分化の一方で活性化する新たな社会運動についての指摘も重要である(p.545)。

第24章 Democracy in Disarray (混迷する民主主義) では、1980年の政権復帰にもかかわらず、党組織のかつてのような包括性は回復されず、著者が「バラノイア」(偏執病, p.548)と表現するような権力への執着と他者不信におちいったインディラの姿が描かれる。柔軟さを欠いた政権は、バン

ジャーブ、アッサムの騒乱をへて、首相暗殺とテリーでの反シク暴動へと行きつく。第25章 This Son Also Rises (もう一人の陽の御子) は、後継のラジヴ政権がムスリム家族法での躓き (p.582) をきっかけにたどる下降過程を描く。地域政党とインド人民党に挟撃された会議派政権は1989年連邦下院選挙での敗北で下野する。

最後の第V部では、トライブ、カースト、ジェンダーなどのアイデンティティに依拠した権利の要求、アヨーディヤー問題を中心とするヒンドゥー・ムスリム対立、会議派の後退と政党関係の変化や冷戦後におけるインド外交、開放経済化への動きという4つの主題が、それぞれRを頭文字とする、第26章 Rights (権利)、第27章 Riots (暴動)、第28章 Rulers (支配者)、第29章 Riches (富) の4章で概観される。このなかでは、第27章に紹介されるインド・ムスリムの心情を反映したテルグ詩人カダル・モヒウッディーンによる詩 (p.645-646)、第28章でのインド軍兵士の出身層のひろがりに関する指摘 (p.677) などが印象に残る。最後の第30章 A People's Entertainments (人々の娯楽) で描かれるのは、文化的シンセサイザーとしてのヒンディー映画、つまり作詞家J.アーファタルの言葉を借りれば、それぞれが文化的特色を持つ20以上の州に加えての、「もうひとつの州としてのヒンディー映画」 (p.765) の世界である。いわば「インド映画の社会史」である。

V 終わりに

——著者とインド民主主義の構想——

本書の副題には、「世界最大の民主主義国」という、あまりにも聞きなれた讃辞が用いられているが、もし、この800ページになんなんとする大著が、インド民主主義への耳あたりの良い通り一遍のメッセージを繰り返すのであれば、それはあまりにも自己満足的、かつ退屈至極にすぎるであろう。しかし、本書は幸いにも、そうした危惧を払拭してあまりある、インドの同時代史を生き、そして今なお生きている人々の豊かな記録である。著者自身は、イン

ド民主主義へのこうした「外交辞令的讃辞」を信奉しているわけではない。彼はインドでは民主的な要素と非民主的な要素は五分五分で、国の統一性も約8割程度のものだという (p.764)。著者の「インド民主主義」への万歳は、E.M. フォースターを借りれば、「二唱」ととどめられているのである。

たしかにインドは民主主義制度を維持しつつ、統一した国として「生き残って」きた(終章)。著者の讃辞は、むしろ制度が十分根付くまで生き続けた独立インドの建設者たち、そして、それを維持してきた有名無名の人々に向けられていると読むべきだろう。重要なのは、「独立インドの市民による労苦と闘い」labors and struggle of the citizens of free India (p.720) である。

そして全巻は、冒頭のガーリーブの問いかけへの聖者の回答でしめくられる。「造物主はこの建造物をお気に召されておる。それゆえにわれらが命には彩りがある。主はそれが滅び朽ちてはてることをお望みにならないのだ」と。これに著者の結びが続く。「(私たちは神に頼ることはできないが) 憲法が原型をとどめぬまでに改正されぬ限り、選挙が定期的に公正に実施される限り、政教分離のエトスが広くいきわたる限り、市民が自ら選ぶ言語で話し書くことができる限り、統合された市場とそれなりに有能な公務員と軍人が存在する限り、——そして、忘れないようにしたいが——ヒンディー映画が鑑賞され、その主題歌が歌われ続ける限り、インドは生き残るのである」 (p.771)。

一次、二次の大量の史資料を駆使して著者が訴えんとしたのは、独立後インドの民主主義制度を支えてきた有名無名の人々の「労苦と闘い」の記録である。数多くの記録のなかで、評者が心を揺さぶられたのは、反骨政治家アーチャルヤー・クリバラニーの瀕死の床での鮮烈なユーモアである。インディラ・ガンディーの非常事態への一貫した批判者であった彼は、パイプやチューブで満身瘡夷となった自分の身体を指してこういったのである。「私の本体 (constitution) はあとかたもない、残りは修繕箇所 (amendments) ばかりだ」と (p.507)⁽⁸⁸⁾。政治的な立場を超えインドの大地に根を張った、この

ような強靱な批判精神こそが、繰り返される「不吉な予言」をそのつど裏切ってきたのである。クリバラーニーのエピソードまで読み進んだとき、評者はこの一冊を手にしたことへの満足感にひたった。

(注1) 本書の歴史書としての性格を表す日本語での最適な表現は「現代史」というよりは、著者自身が用いている「同時代史」(contemporary history)という用語であろう [Guha 2008]。著者は Guha (2008) で、本書執筆の動機や背景を語っている。本書と Guha (2008) への3編のコメント [Menon 2008 : Hegde 2008 : Datta 2008] が *Economic and Political Weekly* 誌、2008年10月4日号に掲載されている。

(注2) この事実を強調するがあまり、戦後の日本憲法については、著者は「押し付け憲法論」に与してしまっている (p.122)。

(注3) 本章での、1954年がネルーの初の中国訪問との記述 (p.171) は誤りである。ネルーは1939年の8月末、第2次大戦勃発直前に訪中している。

(注4) Guha (2008, 195) においても、ネルーへのこうした見方が、「もっぱら今日の産業家らの偏見と好みによるものだ」と手厳しく批判される。「ボンベイ・プラン」の存在とその内容は常識かと思うが、こうした厳しい批判を見ると、知識の風化は激しいのかもしれない。

(注5) Menon (2008) では、おもに本章への批判が展開されている。

(注6) 著者はネルー記念ミュージアム図書館(NMML)所蔵の個人文書を、本書の多くの箇所でも面的に駆使しているが、本書の刊行後、館当局は文書へのアクセスを厳重に制限するようになったそうである [Guha 2008, 197]。著者のグハは、その後もNMMLの運営改善に関して、57名の歴史研究者の賛

同を得た意見書を提出するなどの活動を続けている(たとえば, *Indian Express*, July 17, 2009)。

(注7) 著者は、この点について真相は首相の公的な記録の公開を待つとするが、ガンディー家がこれらの記録を退蔵する状況が続く限り、公開の可能性はないと考えている (p.521, Guha [2008, 197] にも指摘がある)。しかし、一国の宰相の公務記録が、一家族の私物として非公開の扱いを受けるのは、政治それ自体の私物化以外の何物でもないであろう。ここでの著者の指摘はきわめて重要である。

(注8) 出典を克明に提示する本書にあって、この部分は典拠が確認できないことを著者が認める例外的な箇所のひとつである。思うに、たとえ典拠が明らかでなくとも、著者はこのエピソードを書かすにはおけなかったにちがいない。

文献リスト

- Datta, Nonica 2008. "A 'Samvad' with Ramachandra Guha." *Economic and Political Weekly* 43(40) (October 4-10): 81-83.
- Guha, Ramachandra 2008. "The Challenge of Contemporary History." *Economic and Political Weekly* 43(26-27)(June 28-July 5-11): 192-200.
- Hegde, Sasheej 2008. "The Demands of Contemporary History: A Comment." *Economic and Political Weekly* 43(40)(October 4-10): 77-80.
- Menon, Nivedita 2008. "The Historian and 'His' Others: A Response to Ramachandra Guha." *Economic and Political Weekly* 43(40)(October 4-10): 73-76.

(南アジア研究者)